

I 研究テーマ

多様性を受け入れ、子ども同士がつながる学校作り
～児童会を柱に異年齢交流を進め違いを理解する～

II 研究のねらい

西小学校は、上田市の中心部に位置し児童数 367 名の中規模校である。学級数は全部で 18 クラスだが、そのうち特別支援学級が 5 クラス(入級 31 名) がある。素直でやさしい子どもが多く、学校全体は落ち着いた雰囲気である。しかし、特別な支援や配慮を要する児童、不登校傾向の児童、外国籍の児童など多様な児童が増えており、その対応が喫緊の課題である。

これまで表だった偏見や差別は見られないが、特別支援学級の児童への見方や接し方に課題を感じる場面がある。また、外国籍の児童が 8 名いるが、文化や考え方の違いへの理解が十分とは言えない。

そこで、多様な児童を学級や学校全体で受け入れ、その子にとって居心地のよい関係や場所を作りたいと考えた。そのためには、まず学級や学年を越えて子ども同士がつながり、互いの違いを理解した上で信頼関係をもてることが望ましい。

その方策として、学校全体で異年齢の交流を推進したいと考えた。これまでも交流を進めてきたが、児童会の交流活動が単発に終わり、子どもの意識が途切れてしまったり、交流における子どものよさや成長が評価されなかったりと、せつかくの交流が次の意欲や活動につながらないことが課題であった。

そこで次の 4 つのことを見直し、平成 31 年 1 月から学校全体で組織的・継続的に取り組むことにした。

1 異年齢交流の目的とめざす姿を教職員が共有し、活動後に児童へよかった姿を伝える

具体例) 児童会スローガン 掲示物 校長だより

2 児童会やペア学級の交流は、子ども同士がつながるように子どもが主体となって企画運営する

具体例) なかよしタイム えがお集会

3 西小アドベンチャーの目的を再確認し推進する

4 特別支援学級と原学級を開き、互いを知る機会を増やす 具体例) 流しそうめん 音楽会 発表会

これらの体験を重ね、子ども同士が違いを理解することで多様性を受け入れる心情が育まれること、人の役に立つことで自己有用感が高まることを願った。

III 研究の経過と内容

1 実践した時期

平成 31 年 1 月～令和元年 1 2 月

2 研究の内容

(1) 交流の目的とめざす姿を共有し、よかった姿を日常的に伝える

①児童会スローガンを職員も意識して取り組む

毎年、児童会がスローガンを作りその達成に向けて、各委員会が活動している。児童会は、子どもが主体となって新たな学校を作る大切な機会だと捉え、職員もこのスローガンを意識して子どもと共に取り組んでいる。今年度は「チャレンジ～なかよしの輪を広げよう～」のスローガンに寄せて全校が仲よしになることをめざし、交流活動を推進している。右の写真は、新 1 年生と仲よしになることを願って行われた「1 年生を迎える会」の入場である。



6 年生と手をつないで入場

②交流の写真を掲示しめざす姿を共有する

各委員会による交流活動が、単発で終わらないように 6 年担任が成果を写真で伝え、児童の意識を持続させている。廊下の写真を目にするすることで、自分達の姿を振り返り、自己有用感を高めることもつながっている。



また、自分達がどのような姿をめざしたら 交流の成果を次につなげる掲示よいか明確になり、共有できるよさがある。

③校長だよりで学校のビジョンを教職員に伝える

校長だよりを通して、西小の子ども達の課題と異年齢交流の目的を明確にし、教職員が共通理解のもと、それぞれの交流活動に取り組むように働きかけた。

また、校長もできるだけ交流に参加し、相手のことを考えた言動や他を理解しようとした行為を見とり、その場で認めると共に担任に伝えたり、写真で紹介したりした。

④玄関のモニターで写真を紹介し意識をつなげる

交流や行事で見られた相手を思いやる姿や友と関わる姿、がんばった姿をスライドショーで繰り返し紹介し、めざす姿を共有すると共に、次の活動に意識がつながるように工夫した。

子ども達は自分が写っているかが気になるが、その後は仲間の意欲的な姿に刺激を受けていた。

また、保護者や地域の方が来校時にモニターを見つめる場面があり、学校の教育活動を知ってもらうよい機会となっている。めざす方向を継続して伝えられるよさがある。



モニターの写真に関心を示す



笑顔で交流する

(2) 子ども同士がつながるように、子どもが主体となって交流を企画運営する

①共通の目的と見通しをもって継続的に取り組む

交流活動を各委員会がそれぞれに行うのではなく、目的を「なかよしの輪を広げよう」に絞り、交流を積み重ねてきた。また、企画や運営をできるだけ子どもに任せ、自分事として関わられるように支援した。

年間の主な校内の交流（児童会と学校）

通年	朝のあいさつ隊（本部・全校希望者）
4月	1年生を迎える会（児童会）
6月	えがお集会①（本部） なかよしの日①（代表委員会） 運動会の感想交流（ペア学級）
7月	缶積み・ボーリング（リサイクル委員会） なかよしゲーム（なかよし委員会）
9月	なかよしの日②（代表委員会） えがお集会②（本部） 仲よし給食（ペア学級）
10月	オーストラリアの小学生と交流（全校） 音楽会の感想交流（ペア学級）
11月	えがお集会③なかよしタイム（児童会） 西小アドベンチャー（ペア学級） ペア読書（ペア学級）
12月	なかよしの日③（代表委員会） 焼きいも大会（1年→6年）

②えがお集会(隔月)

本校では、児童会に親しみがもてるように各委員会がイメージに合ったキャラクターを作り、衣装も工夫している。例えば、体育員会はサッカーボールのお面を頭につけている。えがお集会では、この衣装でハイタッチ挨拶をして全校を迎える。自然に和やかな気持ちになり笑顔が広がる。



この6年生のユニークな姿から「みんな同じでなくていい。違っていいん

入場時にハイタッチ挨拶で全校を迎える

だ」というメッセージが伝わってくる。

えがお集会では、委員会からの連絡の他にペア学級でゲームを楽しむ時間がある。9月には写真のように手遊びをする中で、なかよしの輪が広がる姿が見られた。



他学年と楽しむ経験を通して、学級を開くよさが全校に広がりつつある。

指をつかまれて 笑顔がこぼれる

えがお集会がありました。入口でいろんな学年の人とハイタッチをすると、なんだか心が通じた気がしてあいさつっていいなと感じました。（6年A子）

③音楽会の感想をペア学級で交換(10月)

ペア学級の活動は、運動会や音楽会の行事でも意識されている。感想をメッセージカードで伝え合い、子ども同士で励ますことで、次への意欲が湧いた。



2年生からのうれしいメッセージ

音楽会で一番心にとこったのは、ペア学年の「エルクンパロチェロ」です。5年生であんなにむずかしい曲ができるとは思わなかったです。（2年B子）

④なかよしタイム(11月)

後期児童会の最も大事な行事である「なかよしタイム」が11月に開かれた。内容はなかよしグループでのクイズラリーであったが、クイズを解いてキーワードを手に入れ、犯人に捕まった3人を助け出そうというユニークな企画であった。始めの会での寸劇のストーリーやセリフも本部役員が自分達で考え、全校に楽しんでもらえるように練習を重ねた。

当日は、1, 2年生を中心に盛り上がり、クイズを全問解いてキーワードを手に入れたという意欲が高まった。

クイズラリーでは5年生が、ペア学級の2年生が楽しめるように、答えをすぐに教えるのではなく一緒に考える姿があった。また2年生からは、5年生を頼りにしている表情が見られた。クイズを解く共通の目標に向かって、お互いに楽しみながら支え合う姿が見られ、ペアの信頼関係が深まったと考えられる。



コナンに扮して盛り上げる



2年生を温かく見守る5年生

体育館に戻りグループごとキーワードを確認した際も、頭を寄せ合って相談する姿が見られた。6年生は、最後まで1年生のことが心配になり、心を寄せて答えを確かめていた。これまでのペア学級の交流を通して、お互いの心が通じ合ってきたことが、強く感じられた。



答えを確かめてもらう1年生

なかよしタイムは、全校のみんながなかよくなるためにやります。はじめにメインの話が出ました。「友だちがつかまっちゃったから、学校のどこかにあるあんごうの紙を見つけてことばを作ってね」と言われました。5年生の子とあんごうの紙を見つけ、手わけしてときました。あんごうを全校のみんなで言ったら、つかまった人が出てきました。これでいっけんらくちゃく。なかよしタイムをやって5年生のペアとなかよくなれた感じがしました。(2年C男)

⑤オーストラリアの小学生との交流 (10月)

オーストラリアから2～6年の小学生7名が来校し全校児童と交流する機会がもてた。堅苦しい交流でなく子ども同士が気軽にふれ合える交流をめざした。

ア 全校児童との交流(1時間)

児童会役員の進行で和やかで楽しい時間を過ごした。

・英語で歓迎の挨拶(児童会長)

・歌とダンスの発表

(全校「しなのの歌」2年「パプリカ」4年「ソーラン」)

・歌とダンスの発表

(オーストラリアの小学生)

・オーストラリアに関するクイズ(6年生が出題)

・じゃんけん列車(全校)



じゃんけん列車で打ち解ける

イ 5・6年生との交流 (3時間)

5年生は、だるま落とししやけん玉、折り紙、コマなど日本らしい遊びを企画し共に楽しんだ。D男は、だるま落としに挑戦した女の子にいていねいにコツを伝えた。しばらくやっていると見事に成功し、自然に拍手を贈り共に喜び合っていた。心が通い合った瞬間であった。



だるま落としが成功し拍手!

また、折り紙ではやり方を教えながらも、近くでやさしく見守る姿があった。相手のことを考え、困った時はお手伝いしようという思いやりの気持ちが働いていた。相手のやり方をまず受け入れることの大切さを感じとっていた姿である。子ども同士の気軽な交流をめざしたことで、心が通い合う場面が多く見られた。



折り紙で互いの距離が縮まる

オーストラリアの小学生と交流会をしました。英語をしゃべるのは苦手だけど、折り紙と一緒にやったり、ゲームを楽しくできたりしてよかったです。オーストラリアの子も折り紙で飛行機ができてよこんでいました。なかよくなれました。(5年E子)

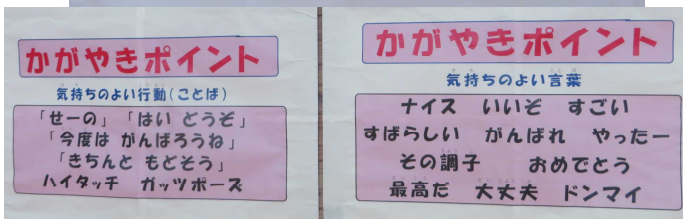
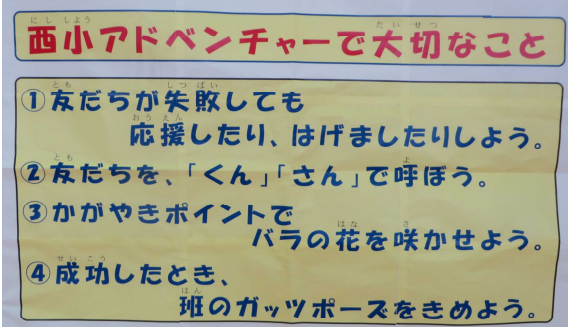
外国の小学生とゆっくり触れ合い、文化の違いを知ると共に、言葉の壁を越えて親しくなれることを肌で感じる貴重な機会となった。

(3) 西小アドベンチャーの目的を再確認して推進(11月)

①かがやきポイントを取り入れ声かけを意識

「西小アドベンチャー」は、肯定的な人間関係を育成するために考えられた教材で、西小の伝統となっている。11月の約2週間、体育館に24種類のプログラムが用意され、チームの仲間と協力し楽しみながら達成感を味わうものである。

昨年度から種目をクリアするだけでなく、仲間との肯定的な声かけが増えるように、かがやきポイントを定めた。これにより、仲間を支えたり成功を喜び合ったりする姿が多く見られるようになった。



②1年生に声をかけやさしく支える6年生

1年生としっかり手を繋ぎ、見事に風船が入った瞬間、6年F男の笑顔が輝いた。F男は日頃表情が固く笑顔を見せることは少ない。1年生をやさしくリードする姿に成長を感じた。異年齢の交流



1年生と手をつなぎ共に楽しむ

によって、表情も心も穏やかになることがわかった。また1年生の役に立てたので自己有用感も高まった。

- 西小アドベンチャーがとても楽しかったです。ペアの子とさらに仲を深めることができました。1年生の子が、ぼくの名前をたくさん呼んでくれたのがとてもうれしかったです。(6年G男)
- 2年生と西小アドベンチャーをやりました。たくさん遊びました。ペアの子がかがやきポイントを多く言ってくれたのでよかったです。(5年H男)

(4) 特別支援学級と原学級を開き、互いを知る機会を増やす

本校では、特別支援学級を温かいイメージで親しみがもてるように「たんぼぼ学級」と呼んでいる。

○1年生と流しそうめん交流

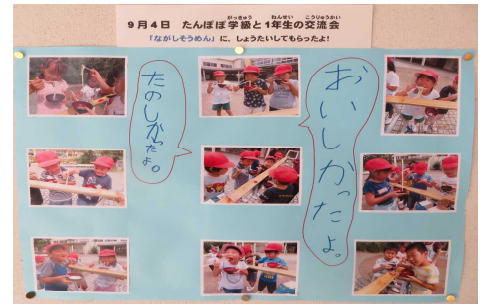
9月にたんぼぼ5組の1年生3人が、原学級の1年1組・2組を流しそうめんに招待した。お箸やお椀を配ったり、食べ方や片付け方を説明したりと大活躍の3人であった。



流しそうめん1年生同士で楽しむ

楽しい企画でお互いにすてきな笑顔がはじけていた。

その後、招待された1年生が写真入りのメッセージを届けてくれた。そこには「おいしかったよ」「たのしかった」という



1年生からお礼のメッセージが届いた

素直な気持ちが表れていた。日頃から原学級と日常的に交流することで、たんぼぼ学級への偏見を持つことがなくなると考える。

本校では、原学級の教室からたんぼぼ学級へ行く際には、「行ってきます」と「行ってらっしゃい」の挨拶が、子ども同士で自然に交わされている。

IV 研究のまとめ

- 児童会を柱に、異年齢交流を学校全体で組織的・継続的に積み重ねたことで、相手のことを考えてやさしく行動する姿が多くなった。また、人の役に立つ経験から自己有用感も高まってきている。
- 学校自己評価アンケートで「思いやりの心をもって友だちにやさしくできる」の割合が、昨年度に比べてかなり高くなった(下表)。

年度	平成 30 年度		令和元年度	
学期	1 学期	2 学期	1 学期	2 学期
割合	89%	86%	90%	93%

このことから相手意識が高まり、多様性を受け入れる心情が育ってきたと考えられる。